

氏 名 堀田 あゆみ

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1735 号

学位授与の日付 平成27年3月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌

論文審査委員 主 査 教授 佐々木 史郎
教授 池谷 和信
教授 朝倉 敏夫
理事 小長谷 有紀 人間文化研究機構
准教授 尾崎 孝宏

論文内容の要旨

Summary of thesis contents

本研究が対象とするのは現代のモンゴル国において遊牧を営む人々である。モンゴルの遊牧民に関しては、放牧・去勢・搾乳などの牧畜技術、牧畜経営にかかわる実践など、人と家畜の関係に関する多くの研究が積み上げられてきた。その一方で、遊牧民を取り巻く物質文化は副次的な扱いとなり、物量の少なさや簡素さへの言及が見られる程度であった。その理由も家畜を連れた季節移動を簡便にするためであるといった合理性や、モノに執着しないといった精神論に帰結されてきた。

本研究はモンゴル遊牧民を対象としながらも、家畜の存在を抜きに、モノとの関係から遊牧民の生き方を探ろうとする試みである。研究の目的は、遊牧民のモノの世界が彼らの相互行為によって生成されていることを例証し、モノが世帯を超えて移動するという現象を遊牧の社会的・文化的文脈から読み解くことである。そのために、モノをめぐる遊牧民の日常実践を分析し、モノの「情報性」という観点から考察をおこなう。

本論文は序論（序章、第1章）、本論（第2章から第5章）、結論（終章）で構成される。序章では研究の課題と視座、および調査方法について述べる。第1章では、ポスト社会主義期のモンゴル国の概況と遊牧民のおかれている現状を概観する。そのうえで、調査地であるアルハンガイ県ホトント郡サント行政区に暮らす遊牧民一家に焦点をあて、彼らを取り巻く社会関係や経済状況について記述する。

第2章では、遊牧民の生活を把握するために、E家の夏営地、冬営地におけるそれぞれの典型的な一日の過ごし方を紹介し、季節ごとの生活・社会環境の違いについて述べる。そして生活の基盤となる社会関係、つまり家畜の放牧を協力しておこなう共営世帯や親類縁者、一日に数十人を数える来訪者の存在について述べた。遊牧民の暮らしは、基本的に家畜の世話を中心に回っているが、一日中家畜の側で過ごしているわけではない。搾乳、放牧地までの誘導、囲いの清掃などという作業と作業の合間には、他家への訪問を欠かさない。共営世帯や親戚、友人など、その日その時々状況に合わせて他家を訪れ、さまざまな情報を交換する。天候や環境の変化、畜産物の市場価格や他家の動向など、生活のあらゆる面にかかわる情報を運んでくるのが「人」である。こうした人の往来が情報社会である遊牧生活の基盤であることをデータによって示した。

第3章では、遊牧民の生活世界における空間秩序とそれに準じたモノのありようを提示した。彼らは、北をホイモル（特別敬われる空間）、西を上座、東を下座とする空間認識を持っているが、それは宿営地の世帯配置およびゲル内の空間利用にも共通している。また、E家の協力を得ておこなった悉皆調査によって始めて、約1,500点のモノが遊牧民の生活世界に存在することが明らかになった。しかし、すべてがE家の所有物というわけではなく、他家のモノが混在しているのが常態であるということも、モノのありようとして特記した。また、遊牧民がモノをどのように捉えているのかを明らかにするために、聞き取った645点のモノの来歴の分析を試みた。そこで多く見られたのは、モノの移動を追跡するかのごとく人物名を織り交ぜた語りである。彼らにとってモノは常にそこにある存在ではなく、他家や他者からの働きかけを受けて変動するものとして認識されているのである。

第4章では、貸借・譲渡というモノのやりとりによって、遊牧民の世帯間をモノが移動している実態を事例を通して詳らかにした。モノのやりとりは当事者間の合意に基づいておこなわれており、その際に貸借か譲渡かということは問題にされず、必要とするモノをいかに融通するかという点に重点が置かれている。このようなモノのやりとりが成立す

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

る過程においては交渉が不可欠となる。交渉に臨む最低限の条件として、対象者にアクセスできること、対象のモノが特定されていることが挙げられる。その際に、親戚、共営世帯、友人・知人などの社会関係を活用するだけでなく、対象者の生活世界にあるモノの情報をより多くもつことが交渉を有利に進める鍵となる。

第 5 章では、モノの情報性へと目を転じる。遊牧民が他家のモノの情報を収集し交渉に利用している一方、所有者はモノの情報を秘匿あるいは積極的に発信することによって情報管理をおこなっている。モノの情報をめぐる交渉では、ソニルホホ（興味をもつ）やオハハ（掘る、理解する）と呼ばれる情報収集行為が社会関係を活用しておこなわれており、収集された情報を基にモノの要求交渉へ転換していく。また、情報の所有者は、家族の必要に応じてモノを秘匿し情報を制御すると同時に、社会関係や社会的立場を維持するために特定のモノの情報を、お披露目、ガエホーラハ（自慢する）、陳列などの方法によって発信していることも例示した。情報の提供が将来の交渉権の分配につながることによって、当事者間の社会関係が形成、維持、強化されることになる。このような情報分配のもつ働きを活用することで、遊牧民は季節ごとに新たな人間関係を構築することができる。モノを直接分配するには数という限りがあるが、モノの情報はいくらかでも分配可能である。モノの情報のやりとりを通して、ゆるやかでより広範なネットワークが形成されていくことになる。その結果、拡散された情報を頼りに交渉がおこなわれ、モノが世帯を超えて頻繁に移動するという状況が生まれるのである。

終章では、序章で提示した研究課題に引き付けて本稿の要点を考察するとともに、モンゴル遊牧社会は、モノの情報自体が交換の対象となり得る情報社会であること、また、交渉によって社会関係が操作されていることを論じた。遊牧社会では、放牧先を左右する宿営地の選定にしても、日々の生活の必要を満たすにしても、すべてが交渉によって動かされていく。状況が自分に好転するのを待つのではなく、自分の要求に合わせて周囲に働きかけていく。そういう意味においてモンゴル遊牧社会は、交渉社会でもある。地理的・空間的に分散して生活し、季節ごとに共営世帯を組み替える遊牧民の間には、固定された地縁や共同体といった感覚が存在しない。それに代わってモノや情報をめぐる他者への働きかけ、つまりは交渉が人と人を繋ぐ役割を果たしていると考えられる。モノに着目することによって明らかになった、必要なモノは自ら取りに行くという遊牧民の生き方は、家畜に必要な水と牧草を取りに行くという遊牧民の姿に主眼をおいてきたこれまでの研究成果を補完するものである。そしてモノと家畜両者に共通するのは、その手立てとして情報と交渉が駆使されるという点である。遊牧民が常に情報を収集し管理し発信する、情報の扱いに長けた人々であることを織り込めば、「簡素で素朴」と思われがちな遊牧民のモノの世界が、モノの管理と情報統制の結果としての戦略的空間としてたち現れるはずである。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、モノと人との関係からモンゴル遊牧民の生き方、特に社会を構成していく際の原則と構造を探ろうとする研究である。その目的をより具体的にいえば、モンゴル遊牧社会において日常的に見られるモノとその情報のやりとりを媒介にした人と人とのつながりや相互作用を丹念に追うことで、モンゴル社会を構成する重要な要素の一つが情報であり、情報発信の意図的な操作が交渉を生み、さらに人のネットワークを形成していくことを示すことにある。堀田がいうモノの情報、あるいはモノをめぐる情報とは、モノの属性や価値だけでなく、その移動履歴や、持ち主やその存在を知る人が付加する語り等も含まれる。

本論文は、研究の目的、課題、方法論、調査方法について述べる序章、5章からなる民族誌的記述と分析、そして結論を述べる終章から構成されている。第1章では、調査地であるモンゴルの遊牧民たちがおかれているポスト社会主義期の状況について紹介した後、調査地であるアルハンガイ県ホトント郡サント行政区に暮らす遊牧民一家の社会関係と経済状況を記述する。

第2章では、遊牧民一家の夏営地と冬営地での暮らし、共営世帯（ともに宿営地を営む世帯）の形態と人の往来のありかた、訪問と往来による情報の入手や交換について紹介する。そして他家への訪問と情報収集がモンゴル遊牧民の日常生活の核である点を指摘する。

第3章では、遊牧民一家の天幕（ゲル）や宿営地の空間構成とその利用について概観した後、その一家の持つモノについての悉皆調査の結果を提示する。さらに、モノについての家族の語り进行分析し、彼らがモノを常時そこにある存在ではなく、他家や他者からの要請によって移動するものとして認識していることを明らかにしている。

第4章では第3章を受けて、モノが交渉によって世帯間を頻繁に移動している実態を描き出す。そしてモノをめぐる情報と社会関係の違いが、そのモノのやりとりに際して行われる交渉を左右しており、しかも、そのとき交渉者どうしが発信する情報の質と量には偏りがあり、それが意図的に創出されていることを指摘する。

第5章では、モノの情報をめぐる交渉について記述し、分析している。他家のモノの情報をモノの入手に利用している一方、所有者はモノの情報を秘匿もしくは意図的に発信することによって情報管理を行っていることを指摘する。また、天幕内外の空間配置やモノの置き方が交渉を制約したり、促進させたりしていること、「情報の分配、交換」（特定の情報を、相手を選びながら提供したり交換したりすること）が社会関係に基づいている一方で、そのやり方によっては人間関係を新たに創り出すなど社会関係を操作できる点を明らかにしている。

終章では、論文全体を要約したうえで、モンゴルではモノとその情報が交渉によって移動し、人間関係、社会関係さえもがそれによって操作されることを指摘し、モンゴル遊牧社会は情報操作を高度に必要とする交渉社会であるという結論が提示されている。

本論文は、遊牧民が持つモノおよびその情報という従来とは違った視点からのモンゴル遊牧社会研究である。モンゴル帝国勃興以来、その優れた情報戦略はたびたび歴史学で指摘されてきたが、遊牧に従事する庶民レベルでも情報の蓄積、秘匿、発信を巧みに使い分けながら、人間関係を維持、発展させており、情報がモンゴル社会を構成する重要な要素であることを実証的に示した点は本論文の優れた点である。

また、現在の遊牧民一家が所有するモノに関する悉皆調査の成果を提示している点も高く評価できる。遊牧民は移動生活がしやすいように、身の回りのものをできるだけ少なく

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

して、身軽であるという言説が流布している。しかし、それが定住者や研究者の先入観と偏見であることがこの悉皆調査で明確に示された。遊牧民もその天幕の中と周囲に、定住者も顔負けするほどの大量のモノを持っていた。数え方にもよるが、堀田が調査した世帯では1000点を超える。堀田はそれらを1点1点丹念に調べ上げ、リストを作成し、その属性を記述し、その一部についてはどのように社会の中を移動してきたのか、あるいは移動する予定なのかを記述した。それはモンゴル物質文化研究において非常に重要な成果である。

しかしながら、不十分なところもないわけではない。例えば、モンゴル地域研究やモンゴル社会の人類学的研究といった地域限定の分野だけでなく、歴史学あるいは社会人類学といったより大きな分野における自分の調査研究の位置づけについてもっと意識的であって欲しかった。歴史学には遊牧社会史に関する分厚い研究の蓄積があり、社会人類学にもネットワーク理論に基づく個人間関係の分析など多くの研究業績がある。本論文はそのように視野をより広くとって従来の研究蓄積と比較しても十分独創的で斬新な研究であり、その点をもっとアピールすることはできると思われる。しかし、それは著者の将来の成長に期待すべき点でもあり、本論文の価値を損なうものではない。

以上を総合的に評価して、本審査委員会では満場一致で堀田あゆみの論文を博士の学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。